

— 花 信 風 —

9月号の注目歌

水道の領収書にははやわが名世帯主なり気の引き締まる

湯のなかにふかく両手を沈めゆき梅雨のはしりの雨音を聞く

被爆者のうめきが人形より聞こゆれば人形の存在理由はあらむ

採れたての香りの高き早緑の滋賀の新茶を手に掬いたり

万葉のセミナー終えて坂道に「つらつら椿」を口遊びゆく

還暦に始めし短歌二十年師と先輩と友の在^{いま}して

清流に稚あゆを送りだすように桜は風に花びらを散らす

汝の入る墓標は未だなかりせばしばらくは吾の心にぞ住め

唐突に指が余っているような気がして握る夏のなにかを

空洞と化したるわれの体躯かな暗く落ち行く水の音あり

よくもまあここまで生きて来たという思いに見あげる星が澄みゆく

葉ざくらへ移ろうきせつの片頭痛ははの患いいまわが身にも

何かしら伝えたき事があったのかわが生まれ日に長兄^{あに}は逝きたり

スイッチは高所にありてオン・オフの操作は老いのストレッチなり

ひとひらの桜の花がベランダに配達人は春の嵐か

明日の朝目覚めぬことを怖れつつ灯りを消して眠らんとする

菅 洋子 選